

## 理論経済学の方法（Ⅱ）

岩 崎 秀 二

筆者は前号（開学10周年記念号）に帰納的方法と演繹的方法を中心にして理論経済学の方法を考察したが、本稿はその続論であり、精密的方法と経験的方法及び静態的方法と動態的方法について若干の考察を行なっておきたい。

### 1. 精密的方法と経験的方法

精密的方法と経験的方法の対立はカール・メンガーが特に重視して論じたものであるが、今日においても基本的には十分意義をもつものといえる。今日計量的あるいは数理的方法が経済理論の解明に応用されているとはいえ、なおかつこの二つの方法の対立は存するといえる。

メンガーによれば社会現象の理解には次の二つの方法がある。すなわち第一は、「一つの具体的な現象の個別的な生成過程を研究することによって、換言すれば、そのもとにおいて、それが生成し来ったところの、それに特殊な個性において現にそれがあるがごとくに生成し来ったところの具体的な事情を意識に上らせることによって、この具体的現象を、特に歴史的な方法によって（その歴史を通じて）理解する」方法であり、そして

第二は、理論的理解である。すなわち「ある具体的な現象をその継起または共存におけるある規則性（合 律 性）<sup>ゲゼッツリツヒカイト</sup>の一つの特殊な場合として認識することにより、これを理論的な仕方で理解する。我々はある具体的現象において、専ら現象一般のある合律性の類例を認識することにより、この現象の存在の根拠、およびその本質の特殊性を意識にのぼす。したがっ

て、たとえば、我々が具体的な場合において、地代の騰貴、資本利子の低落などを理論的に理解するのは、その現象が専ら地代・資本・利子などの諸法則の特殊な類例として現われ来<sup>2)</sup>ているがゆえである。」

ここにメンガーのいわゆる歴史的方法は、我々の当面の問題とはならない。それは科学の歴史的部門における方法だからである。従って歴史的方法—理論的方法という一対の方法は、理論経済学に関する限り、後者のみが我々の関心を喚び起すものであるからこれを対蹠的に論ずる必要がない。理論経済学の取り扱う発展は、歴史的な時間のディメンジョンの上における連続的な継起ではなく、図式のうえにおける諸現象の同時的な共在から必然的に成立する自発的な変動—動態現象の法則を知り、それを理論化しようとするのである。

**経験的方法** 現象を理論的に説明するためにまず考えられる方法は、メンガーによれば、現実的・経験的方法 (die realistisch-empirische Methode) である。それは

「諸現象の定型および諸定型的関係を、諸現象がその『完全なる経験的現実態』において、すなわちその本質の全体性および完全な複合において、如何に現われているかを考究すること、換言すれば、現実的諸現象の全部を、一定の現象形態において秩序づけ、それらの共在と継起<sup>3)</sup>における合律性を経験的な遣り方において確めようとすることである。」

しかもこの経験的・現実的方法をただちに現実態における諸現象の理解に、無難作に用い得るかというに、必ずしもそうではない。

「諸現象は、その完全な経験的現実態において、経験的には、ある現象形態において繰り返して現われるが、決して完全な厳密性をもって繰り返さない。何故なら、二つの具体的な現象が全き一致を示すことは殆んどなく、いわんや比較的大なる群の現象がそうである場合もないからである。『経験的現実態』においては、すなわち諸現象がその本質の全体性と全き複合とにおいて考究されるときには、決して厳密な定型は存しない

からである。恰も、各個の具体的な現象は、つねに特殊な定型として提示されており、従って理論的考察の目的と効用とが完全に揚棄される如く思われるからである。諸現象形態の『すべての経験的現実態』を包括するところの厳密な諸範疇を確立しようとする努力は、かくして理論的考察にとっては、到達し得ない目標である。<sup>4)</sup>」

かくて、現実的、経験的方法によって、完全な厳密性を具えた定型を確定できないとすれば、これによって定型的諸関係の確定、すなわち、完全な厳密性をもつ法則の定立もまた不可能であるといわなければならない。

「諸現象の世界が厳密に現実的な仕方で考察されるならば、これらについての法則は、単に、ある現象形態に属する現実的諸現象の継起と共存における、観察という方法において確められた、事実上の合理性を意味するに過ぎない。かかる見地のもとにおいて獲られた『諸法則』は、実際には、ただAなる現象形態およびAなる現象形態に属する・具体的な諸現象に対しては、實際上、規則的にまた例外なしに、Cなる現象形態に属する現象が継起するか乃至はそれがAおよびBに属するものと共存的に観察されるということを意味し得るに過ぎない。AおよびBなる現象一般に（すなわちすべての、否いまだ観察されていない事例についてすらも）Cなる現象が継起するという結論、あるいはここに問題となれる諸現象が一般的に共存しているという結論は、経験を超えたものであり、厳密な経験主義の見地を超えたものであって、それは「現実的・経験的」上記の方法の立場からは厳密には保証されていない。諸現象の厳密な法則は、理論的研究の現実的方向の帰結では、決してあり得ない。たといそれが考え得べき最も完全な現実的方向であり、またその基礎に横たわる観察が最も包括的な且つ批判的なものであったとしても。<sup>5)</sup>」

かくして我々が経験的・現実的方法によって獲得し得るものは、現実的定型と経験的法則の二つであるが、これは上述の如き限定的な意味においてしか精密性をもっていない結果として、次のごとき範囲の妥当性をもつ

にとどまる。

「現実的定型 (Realtypen), それは現実的な諸現象の基本的形態であって、その定型的形像のうちにおいては諸特殊性に対して (現象の発展に対してもまた) (許容される) 余地が多少とも存している。

経験的法則 (emperische Gesetze) それは我々に対して、現実的な諸現象の継起と共存とにおける・事実的な (しかし例外なきことが少しも保証されないところの) 合律性を意識せしめるところの理論的認識である。<sup>6)</sup>」

かくしていわゆる「現実的・経験的」方法は現象界のすべての領域において駆使することができるけれども、これによって獲得される法則は形式的に不完全であり、「その理論は単に欠陥多き理解、不確実な見透しと現象に対する徹底的には確実でない支配を許容するに過ぎない。<sup>7)</sup>」 かくしてこの欠陥を補うことのできる方法が要請されることになる。

**精密的方法** かかる要請に基づく方法に対してメンガーは精密的方法 (die exakte Methode) という名称を与えている。精密的方法によって獲得されるものは、

「諸現象の厳密な諸法則の確立であり、諸現象の継起における合律性の確立である。それは単に例外なしに現われるのみならず、我々がそれに到達した認識方法に関する限り、例外のなきことの保証をさえ含意している。それは普通『自然法則』と名づけられているが『精密的法則』なる名称で呼ぶ方が遥かに正しい。<sup>8)</sup>」 そして

精密的法則とは、「唯一の場合においてのみ認められるに過ぎないとしても、正確に同一の事実的な諸条件のもとにおいてはつねに再び現象として現われるに違いないという命題、または、その本質上これと全く同じことであるが、一定の種類の厳密に定型的な諸現象に対しては、同一の事情のもとにおいては、つねに、しかも我々の思惟法則に関してまさに必然的に、同様に一定の種類の他に厳密に定型的な諸現象が継起せざるを得ないという命題である。AおよびBなる現象には、それが厳密に定型的に考え

られる限り、同一の事情のもとにおいては、つねに、厳密に定型的なCなる現象が継起せざるを得ない。たといここに問題となれる現象継起が、単に一つの場合にだけ認められるにしても、この規則<sup>レーゲル</sup>は、諸現象の本質についてのみ妥当するのではなくて、またそれらの分量についても妥当する。そして経験は、この規則に関しては、何等の例外をも示さないのみでなく、批判的悟性にとっては、かかる例外は、むしろ全く思いもよらないものでさえある。<sup>9)</sup>」

精密的方法是先ず第一に定型の確立をなす。すなわち

「それは、すべての実在的なものの最も簡単な諸要素を、そしてそれがまさに最も簡単なるがゆえに厳密に定型的に考えられざるを得ないところの諸要素を発見しようと努める。それは単に部分的にのみ経験的・現実的であるところの分析の方法によって、これらの要素の確立に努める。すなわちこれらの要素が現実態において独立的な現象として存立しているか否かを考慮せず、いなそれらが完全な純粹性において、そもそも独立的に表現され得るや否やということをすら考慮しないのである。この方法において、理論的研究は、質的に厳密に定型的な現象形態に到達する。また完全な経験的現実態にあてはめて検証することはできないけれども、精密的法則の獲得のための必然的な基礎であり、前提であるところの結論に到達する。<sup>10)</sup>」

次に精密的方法是定型的諸関係、すなわち現象の法則の確定をなす。

すなわち

「現実的な諸現象の継起等における合律性を研究するのではなくて、それはむしろ現実的世界の最も簡単な・部分的にはまったく非経験的な・すべての他の諸影響から離れた諸要素から、如何ようにして複雑な諸現象が展開して来るかを、精密な（同様に理想的な）尺度を常に考慮しつつ、研究するのである。〔この際〕……これらの最も簡単な要素、またはこれらの要素の該複合が、人為によって影響されていない現実態のうちに実際に認

め得るや否や、否これらの要素または複合が、その完全な純粋性において、  
そもそも表現され得るや否やをさえ考慮しない。それはまたこの際完全に  
精密な尺度が、現実には可能でないことを意識している。しかもなおこ  
れらのことを前提として出発するのは、他の方法をもってしては、精密的  
研究の目標、すなわち、厳密な法則の確定が決して達成され得ないのに対  
して、厳密に定型的な諸要素の・それらの精密な尺度の・およびその他のす  
べての原動力的要因から孤立の・前提によって、……単に例外を有しない  
というだけでなく、我々の思惟法則そのものによって、例外を有せずとい  
うほかには考えられないような現象の法則に一すなわち諸現象の精密的法  
則に……到達するからである。<sup>11)</sup>

かくして「我々は、人間的諸現象を、その最も根源的な・且つ最も単  
純な構成的要因に還元し、これらの諸要因に対して、それらの性質に適応  
する尺度を与え、最後に、それらの孤立において思考された・これらの最  
も簡単な諸要素から、複雑な人間的諸現象が形成されるときに諸法則を研  
究しようとするのである。<sup>12)</sup>

理論経済学において精密的方法を用いることは、前述したところにした  
がって

「人間的経済の最も要素的な諸要因の研究、該諸現象の分量の確定と、  
人間的経済の複雑な諸現象形態がこれらの最も単純な諸要素から展開する  
際に従うところの諸法則の研究<sup>13)</sup>」を意味するのである。かくて、この場  
合にまず第一に規定しなければならないことは、いわゆる「人間的経済の  
最も根源的な・最も要素的な要因」とは何かということである。メンガ  
ーによれば、それは

「諸欲望、人間に対して直接的に自然によって提供された諸財（これに  
関連した享楽手段ならびに生産手段）および可及的に完全な欲望満足（可  
及的に完全な財需要の充足<sup>14)</sup>）に向っての努力である。」

以上のごとく、メンガーの精密的方法は数学的知識の使用などについて

彼が如何に考えていたかが不明であり、従がって通常のいわゆる精密的方法と称するものと合致しない点もあるが、その論理的形式的意味においては「精密的自然科学」の方法とまったく同一である。メンガー自身「原論」の序文において、次のごとく述べている。

「人間の経済の複雑な諸現象を、その最も単純な・確実な観察をなお許容するところの諸要素に還元し、これらの要素に、その性質に適応した尺度を与え、この尺度を確保しつつ、再び、複雑な経済的諸現象が、その諸要素から、如何に合法的に展開し来るかを研究しようと努めた。」

「これこそは、諸々の自然科学において使用されて、非常に大きな効果を収めたところの・そしてそのために誤って自然科学的方法とも名づけられるところの研究方法である。しかし乍ら、それは、一切の経験科学に共通なものであり、より正当には経験科学的方法と名づくべきものである。」<sup>15)</sup>

自然科学は幾多の苦悶をへて形而上学的自然観から解放されて今日の精密的科学に到達した。そして自然科学において用いられている精密的方法は次のような経路をへて現われてくる。

第一段階は要素化 (Elementarisierung) である。たとえば光の電磁波への、化学的現象の電気的現象への還元のごとく、より単純な事象を発見し、その属性のうちに当該現象の説明原理を求める元素の概念や細胞の概念のごときがそれである。

「要素化の過程はその認識的内容に基づいて、正しくは次のごとく表示される。すなわち、ある対象を認識すること、すなわちこれを説明することは、自然科学においては、何か他のものへの・その還元をいう。それはつねに次のごとくに行なわれる。当該自然現象に、ひとが他の現象にも見出し得る同じ性質または表徴がつねに発見され、二つのものは、もはや異なったものとは思われず、むしろ一は他の特殊の事例と考えられ、まさにかくすることによってこれに還元される。」<sup>16)</sup>

これに関してはウィンデルバントの次の言葉は当を得ているといえるで

あろう。

「日常生活や特殊知識において個々の因果関係が仮定されるとき、また科学において個々の因果法則が問題にされるとき、生成として総合的に総括される諸状態、すなわち過程の初めと終りとは多くは互に相似ないものである。……原因と結果とが違えば違うほど、両者間の因果関係が益々わからなくなるように思われる。……之に反して衝突と反衝、圧と逆圧の如く両者が原理上等しき場合には一の他への転化は何等の困難も伴わない。そのときこの関係は理解されるといわれる。この意味において、例えば加熱と機械の作業の如く初めと終りとが遠く離れている複雑な現象をも吾々は、それを個々の基本的現象に分解することによって一層理解され得るものとする。なぜなら原因と結果とが比較的似ているために、例えば機械のもつ個々の歯車や振子が他のものへ運動を移すごとく、最早何等の特別な困難も生じない如く思われるからである。種類の異なるものの因果性は、もしそれが種類の同じものの純粹の因果性に分解されるならば、一層理解されるものとなる。従って、自然研究は物体の凡ゆる生成を結局機械的に説明する。換言すれば原子から原子への運動の移行へ還元するという必然的傾向を有する。熱はそれが分子運動と解されるとき、理解されと思われる。電気や光もまたそれがエーテルの振動に還元されるとき理解されと思われる、等々。理解の要求は同一性の要請に他ならない。そして物的自然の現象は、それが同一種類の因果という単純な形式に分解される程度に応じて理解されることとなる。生命又は有機体の機械的理解に関するすべての問題は<sup>17)</sup>この方式に帰せられる。」

第二段階は数量化 (Quantifizierung) である。「還元」は数量化のための準備に過ぎない。諸現象がある一定の要素に還元されるということは、諸現象がそれぞれこの要素の何倍かに当るということ、すべての現象がこの要素を公分母として通約され、かくして一定の数的比例において立つこと、すなわち、あらゆる性質が、無性質な元子の数的関係に翻訳されうる



ことを意味する。

第三段階は数学化 (Mathematisierung) である。現象の数量化によって、問題となった諸現象は、すべて確定した数値をとり、かくしてこれらの現象の間に存する法則が数学的記号をもって象徴されることができ、一定の方程式群によって表示されることになる。

以上は自然科学における精密的方法についての立言であるが、社会科学においてはかくの如き精密的方法が可能であろうか。経済学においては現にこの方法が用いられて今日長足な進歩をなしつつあるが、その可能性は如何なる意味においてであろうか。

上述したことによって知り得たように精密的方法において最も重要なことは、現象の可測性ということである。そして可測性の問題は結局現象の本質的属性に矛盾することなく自己を貫徹してゆくことを許容される測定の尺度を獲得できるかどうかということに帰する。そしてこの尺度は、当該現象を分析していった (ゾムバルトのいわゆる要素化)、ある特定の構成要素に到達したときに、いわゆる *das letzte Ding* として確立される。

しかし精神的・文化的社会現象についてはかくの如き測定の尺度を見出すことに対して否定的な答が与えられている。社会的現象は、自然的現象に比して原因・結果の連鎖の錯綜性が大であり、しかもこの間にあって、感性的に現象を分析してゆくことが困難であって、物質的形態をもつ尺度を立てることは結局不可能であるからである。かくして、分析は思惟のうちにおける抽象的考察ということになるのであるが、ここに普遍妥当的な尺度の確立ということが困難となる原因が存する。経済学についていえば、最も単純な基本的な要素は結局経済価値であり、測定ならびに尺度の問題は財に体现しているところの経済価値の量の確定ということであり、これに関して価値論上種々の見解が存しており、それが学派を決定しているのである。ただここで強調しておかねばならないことは、精神科学におけるこの尺度は要するに仮説的なものであるということである。

しかしこの点では自然科学も同様であって、要するにその学の本質および認識目的に鑑みて尺度として可及的に有用な・目的合理的であるものを求めて努力してきたわけである。従来<sup>17)</sup>の経済学説においてメンガーの限界効用価値説とマルクスの労働価値説とがこの尺度の追求について、経済現象の可測性についての偉大な試みであったことはいうまでもあるまい。

しかし我々にとって本質的な問題は、経済現象の可測性が如何ように仮定されているか、推し弘めていえば精密的方法が如何ように使用されているかということである。

**精密的方法と経験的方法との関係** 以上主としてメンガーに依って精密的方法と経験的方法との間の差異についてのべてきたが、要するに精密的方法は、現象に対する極度の抽象化によって、理論の当該段階が要求する以外の総ての要素を捨象した後に残るある要素について、法則を求めるものであり、経験的方法は、現象を、具体的に与えられたままの相<sup>スガタ</sup>において考察して法則性に達しようとする方法である。前者によって獲得されるものは精密的法則、後者によって獲得されるものは経験的法則といわれる。精密的法則は諸現象の共存と継起における諸合律性、例外のない合則性である。経験的法則は「例外がなお可能であると思われる合則性である<sup>18)</sup>。」両者の区別はその厳密性が絶対的であるか、相対的であるかという点に存する。

理論経済学において、他の理論科学におけると同様にこの両者の形式的に相異なる認識が相並んで行なわれるのを見るが、メンガーはその理由として次のごとく述べている。

「両つの研究の方向は、相補完し合って、我々に国民経済の異なる諸領域の理解の途を開くのでは決してなく、むしろそれらのそれぞれの機能は、我々をして、国民経済的諸現象の全領域をそれぞれの独自の仕方において、理解せしめるところに存する。……」

「諸現象の領域が複雑になればなるほど、該現象を、その最も単純な諸

要素に還元し、それによって前者が後者から合則的に構成されてゆく過程を研究する任務は、いよいよ困難かつ包括的となり、精密な研究の完全にして満足な結論を得ることが、いよいよ困難となる。かくして自然科学におけると同じく、社会科学研究の領域においてもまた、複雑な諸現象に関しては、概して経験的法則のみが存立し、自然および人間生活のより複雑でない諸現象に関しては、精密的理解が著しい重要性をもつという事情もまた説明できよう。かくして現象界の複雑な諸現象に関連するところの理論的認識に関しては、現実主義的な研究方向が優位であるのに対して、より複雑ならざる諸現象に関しては、精密的な研究方向が優位であるを常とするという周知の事実も明らかとなる。しかも原理的にこれら二つの研究方向は、現象界のすべての領域のみならず、現象の複雑性のすべての段階にもまた適充するのである。<sup>19)</sup>」

理論経済学においては一般的に、全体体系の諸部分のうち、初めの段階に位するものにおいては精密の方法が支配的であり、次第に経験的方法の介入する余地が生じてくる。これは、具体性への志向の原理によって、単純なものから複雑なものへの方向において展開される結果である。このことは例えばカッセルが原論において景気変動論に移る際に、精密の方法から経験的方法に移り、かつそれを明白に意識していることに一つの例証を見出すことができる。理論経済学の本質的任務は経済の諸定型と定型的諸関係とに関する法則を追求するところにある。経済現象については厳密に自然科学的意味におけるように精密な法則は得られないかも知れない。しかしそのために理論経済学の存立を否定することは許されない。

精密の方法と経験的方法との関係は以上の如くであるが、さきに述べた**演繹的方法—帰納的方法**の一对の方法との関係は如何。精密の方法が演繹的方法の一亜種であること、むしろ演繹的方法の別名でさえあることについては云うまでもないであろう。問題は経験的方法にある。それはこれを用いるに当っての理論の段階の如何によって、精密の方法に近いものか

ら始まって遠いものに及ぶ度差をもって用いられている。そして精密的方法から遠いものほど帰納的方法に近い。しかし経験的方法の目指すものが法則性の発見である以上、何等かの前提をもたねばならない。そしてそれは精密的方法における前提に比してより具体的であるが、演繹的推理の出発点となることは、精密的方法におけると同様でなければならない。すなわち推理の態度として原理的には演繹的方法のそれである。ただその際立てる前提の獲得に帰納的色彩が濃厚であるというに過ぎない。

理論の目標は一切の具体的な複雑な経済現象をその属性の隅々にいたるまで、質的量的に根本原理から一義的に説明することである。ただ現象の複雑な連関性がそれを容易に許さないために諸現象を分析し、共通な諸要素によってこれを総合して、一群の要素に関する法則または理論をたてる。そこに分析と総合、帰納と演繹の統一を見るのである。しかしここで用いられる方法はきわめて具体的な経験的方法であり、従って立てられる法則・理論は極めて具体的な経験的法則である。ただ分析と総合、帰納と演繹との統一を抽象的な相においてなすことにより、用いられる方法がいよいよ抽象的なものになることによって、いよいよ精密的方法に近づき、法則は精密的法則または理論に近づく。かくして理論獲得の過程は分析と総合との・帰納と演繹との・漸層的な統一を意味し、しかも理論構成のこの統一的な・漸進的な過程の成立と進行との根本原理は、精密の方法の前提として設定されているのである。しかしてこの前提よりすべてを説明し、逆にその前提の自動的展開すなわち精密の方法を経験的方法によって調節してゆくのである。

そこにはかくして経験的方法と精密の方法とが併用されるが、その主導的立場に立つものは精密の方法である。理論経済学は原理的には演繹的方法を用いるのであり、最も完成した演繹的方法は精密の方法であるから、理論経済学の方法は、精密的演繹法であるといってもよいであろう。

- 注 1) C. Menger, Untersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften und der Politischen Ökonomie insbesondere 1883, S. 14
- 2) a. a. O., S. 17.
- 3) a. a. O., S. 34.
- 4) a. a. O., SS. 34—35.
- 5) a. a. O., SS. 35—36.
- 6) a. a. O., S. 36.
- 7) a. a. O., S. 38.
- 8) a. a. O., S. 39.
- 9) a. a. O., S. 40.
- 10) a. a. O., S. 41.
- 11) a. a. O., SS. 41—42.
- 12) a. a. O., S. 43.
- 13) a. a. O., S. 45.
- 14) a. a. O., S. 45
- 15) C. Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, I Aufl. 1871, Vorrede, S. XIV. 安井琢磨訳「国民経済学原理」序言 3 頁.
- 16) W. Sombart, Die drei Nationalökonomien, S. 105.
- 17) W. Windelband, Einleitung in die Philosophie, SS. 153—154.
- 18) C. Menger, Untersuchungen. u. s. w. S. 25.
- 19) a. a. O., SS. 52—53, S. 256.

## 2. 静態的方法と動態的方法

経済を一つの全体として把握する方法に静態的方法 (static method) と動態的方法 (dynamic method) とがある。静態的方法は全体を動かざる状態、あるいは不動のものと仮定して把握する方法である。動態的方法は全体を動く状態において、あるいは現実現象に則して把握する方法である。

**静態的方法** この方法は全体を不動のものと見て、その内部における諸部分の間の関連と諸部分と全体との間の関連を認識するのであるが、その際我々は全体と諸部分とを文字どおり不動のものとして見るのではない。また決して全体の一瞬時ににおける姿を瞬間写真に撮すのでもない。本来我々の描く全体は、空間的にまた時間的に区画づけられた一つの

封鎖的系列であって、そこには特定の時間経過がすでに含意されており、諸部分が生きていて、この時間経過のうちに、その相互関係において、また全体に対する関係において運動することが、当初から前提されている。ただこの際諸部分が変動しても、それらのもつ多様な方向と大きさとにおける力が結局において釣り合い、全体をして運動せざる状態にあらしめるのである。換言すれば全体を均衡状態において見、この状態においてその構成諸部分が如何なる関連を相互間において、また全体に対して持つかを、すなわち全体の構造を知ろうとするのである。

**動態的方法** 動態的方法は全体が時間経過とともに漸次その総貌を変じてゆく過程を捉えて、そこに如何なる必然性を見出し得るかを考察する。全体の運動といっても、決して諸部分の変化を離れた運動を表象することはできない。結局諸部分なかんづく該全体の基本的・構造的諸要素（契機）が時間経過とともに、それ自体として量的に変化し、これによって諸部分の間の関連が変じ、惹いては全体の形相が変動するのを捉えるのである。動態的方法はかかる全体的運動の過程における諸部分の間の・また諸部分と全体との間の必然的な関連を見、殊に全体の動向を知るための方法である。この場合、その変動が全体をして変容せしめるための原動力となる重要な契機—与件—が何であるかを把握することが最も肝要な事柄である。

一般に全体の運動を把握する方法として二つの見方が成立する。一つは発生史的な見方に立つ歴史学的意味における方法である。封建的経済が資本主義経済に推移し、初期資本主義が高度資本主義になるという如き態度がこれである。社会全体またはある側面についてのこのような歴史的展開または発生史について法則を定立することができるか否かについては一つの難問題を形成しよう。

その二は、社会的生活のある歴史的段階において成立している一定の構造をもつある一つの全体、例えば自由資本主義的経済における諸現象、なか

んづくその構造的要素の変動が、この経済における諸現象ならびにこの経済全体を如何に変動せしめるか、そこに如何なる法則が存するかを追求するものである。この方法においては、我々はたとえば資本主義経済という一つの全体をそれに内在する法則性にしたがって自発自転してゆく過程において、しかも時間経過を許すにしても、発生的な意味においてではなく、単に描き出されている図式の表面における期間を考えて、この期間における運動において把握しようとするのであり、その意味においてそれは理論科学的方法である。そしてこれこそまさに静態的方法に対するところの動態的方法という名に値する方法である。

**静態的方法と動態的方法** は相対立する方法であると考えられるけれども、必ずしもそうはいえない。現象を静態として見るのは、これを動態的に見るための手段または準備としてである。我々の認識対象は現実には不斷に変動しており、我々の認識目的は、現象のこの流動性の実相を把握して理論化することにある。現象の運動する貌を概念を通じて把握しなければ我々の認識目的は達成されない。然らば何故に静態的考察が必要であるかというに、我々は運動を直ちに運動の相において概念を通じて把握することができない。運動状態における形相は不斷に変転して応接に暇なく、またそれにおける諸要素間の連関は極めて複雑である。それゆえこれを簡単化して把握しなければならない。この際最も合理的な方法は運動態を静止している状態において把握することである。これによって静止状態における全体の構造を把握し、然る後に、この全体の諸契機がその内面的必然性によって変化し始めるとき、全体が如何に動き始め、運動が如何なる結果を招致するかを知ることができるのである。かくして結局静態的方法是動態的方法に対立するのではなく、むしろその手段となる。もしくは準備工作であるといわねばならない。

この二つの方法すなわち静態的方法と動態的方法はいかなる理論科学においてもこのような関係で用いられているが、経済学においても亦然りで

あり、特に重視された方法である。均衡理論の確立によってその意義は一層重要視されてきたものである。

シュンペーターは「理論経済学の本質と主要内容」<sup>1)</sup>において静態論を、「経済発展の理論」<sup>2)</sup>において動態論を展開し、静態動態を峻別して理論を構成し、静態及び動態の概念を明確にするとともにこれを確立した。そして静態法則と動態法則の導出を試みたのであり、シュンペーターの二分構造<sup>3)</sup>には残された問題点があるとはいえ、その功績は永くこれを記念しなければなるまい。

そもそも理論構成の仕事は、経済の構成要素たる諸現象の数量が変動する場合の法則と理論、すなわち経済の動態的法則と理論の樹立こそ真の目的なのである。一つの全体としての経済の理論は、まず静態的方法によって静態—一般均衡—について構成されるが、それは現実の経済の相に極めて遠いものである。我々はこれから発足して現実の動く経済に逐次近接してゆくのであるが、静態理論に続く歩みは斉一的変動をなす経済、すなわち高田保馬博士の動態的均衡<sup>4)</sup>乃至カッセルの *die gleichmässig fortschreitende Wirtschaft*<sup>5)</sup> についての理論構成を意味することになる。そしてこれに接踵して変動率の均斉でない、真の意味における動態(攪乱的動態)の理論が続く。しかして、この動態にも多様の度差が見られるのであるが、これを整理すれば摩擦的なものと、周期的なものと、構造的なものの三つに分けられるであろう。これに趨勢的変動が入るか否かには異論があるが、むしろこれは歴史的研究に入るであろう。

かくして動態的方法の成果は経済全体の変動の理論であり、それは景気理論を包含し、理論経済学における最も重要な部門をなすのである。

最後に静態的方法と動態的方法に対する演繹的方法と帰納的方法の関係について一言する必要がある。一般的に言えば、静態的方法は演繹的方法を主として用い、動態的方法には演繹的方法も用いられるが、帰納的方法も多く用いられるということである。従ってまた静態的方法には精



密的方法が、動態的方法には経験的方法が対応して用いられてきたということも首肯されるであろう。

- 注 1) J. A. Schumpeter, Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie. 1908.  
2) J. A. Schumpeter, Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung, 1912.  
3) 拙稿「シュンペーター理論の科学的性格」新潟大学法経論集第5巻第3号, 昭和31年.  
4) 高田保馬, 「経済学概論」187頁.  
5) G. Cassel, Theoretische Sozialökonomie, S. 6.